

近代通信の翻訳語「平文」

新井菜穂子

はじめに

外来の事物に対する日本語の表記法には、漢語とカタカナが存在する。近代通信に関する語彙として、エレキ、テレグラフ、テレフォンといったカタカナ表記の語も存在するが、使用頻度から言えば、電気、電信、電話といった漢語の方が多く用いられ、広く社会に流通する一般用語としても定着している。

一方、現代のインターネット時代における通信関連の用語は、Computer network は「コンピュータネットワーク」、Routing algorithm は「ルーティングアルゴリズム」、また、MPLS (Multiprotocol label switching) は、そのまま MPLS が用いられる。これらの用語について、外来語も全て漢字で表記する中国語では、「コンピュータネットワーク」は「计算机网络」、「ルーティングアルゴリズム」は「路由算法」、「MPLS」は「多协议标签交换」と翻訳される¹。このように近代通信の用語について、日本語ではカタカナや原語の頭文字で表記される例が多いものの、「輻輳」「平文」のような漢字表記の例もある。「輻輳」は、以前から存在していた漢語が近代通信の用語として定着した例であり²、中国では「拥塞」と翻訳される。

「平文」は cleartext または、plaintext の翻訳語として用いられるが、そもそも「平文」ということばは一体どこから来たのか？いつ頃から通信用語として使われるようになったのであろうか？中国ではどのように翻訳されているのだろうか？

1. 辞書における「平文」

通信業界では、「暗号化されていない生のテキスト文(データ)」、あるいは「文字列として入出力可能なデータ列」を「平文」と言い、「ひらぶん」と湯桶読みするのが通例である。

一般に、コンピュータ通信では、人間の自然言語によるコミュニケーションをまず文字コードで示し、それをコンピュータが処理可能な「0」と「1」の2進数で表現されたバイナリデータ(Binary Data)に変換し、場合によってはセキュリティ上の安全のために暗号化を施して情報(データ)が送受信される。このような処理を行っていない文字列(データ)が「平文」である。端的に言えば、「平文」とは、人間の目で判読可能な文字列ということになる。

¹ 『计算机网络』第5版, [美]特南鲍姆, [美]韦瑟罗尔著; 严伟, 潘爱民译, 清华大学出版社, 2012年

² 拙稿「关于汉语词“輻輳”」『亚洲概念史研究』第5卷, 孙江主编, 商务印书馆, 2019年

(株)インセプトの「IT用語辞典 e-Words³」では、次のように説明している。(太字下線筆者、以下同様。)

平文(cleartext)とは、暗号化されていない状態のデータ。暗号技術に基づく復号、解読などの操作を行わなくても、そのまま内容を取り扱うことができる状態のデータのことを指す。「文」(text)という語が充てられ、「パスワードを平文で送る」といったように、実際、多くの場面で文字(テキスト)を指すが、暗号化されていないデータ全般を含む概念であり、文脈によっては画像、音声、動画、実行形式のコンピュータプログラムなどのバイナリ形式のデータを指す場合もある。平文のことを「プレーンテキスト」(**plaintext**)と呼ぶこともあるが、これは暗号以外の分野ではバイナリデータの対義語(文字コードに規定された符号のみからなる、文字列として入出力可能なデータ列)であり、必ずしも「暗号化されていない」という意味とは限らない。

慣用的に「ひらぶん」と湯桶読みすることが多いが、例えば JIS 規格(JIS X 0008 情報処理用語)では「ひらぶん」と「へいぶん」が併記されており、「へいぶん」が誤りというわけではない。

つまり、「平文」の意味は二つあり、ひとつは「暗号化」していない文章(非暗号文、cleartext)、もうひとつは「0」と「1」の二進数で表す「バイナリデータ」ではない文章(非バイナリデータ、plaintext)で、いずれの操作も施していない文章ということである。

また、「日本大百科全書(ニッポニカ)」の「手旗信号」の項目には、「国際方式には、ローマ字を**平文**で送る方式とモールス方式の2種類がある。」という記述がある。ここでは、モールス信号に対する対概念として「平文」が使われている。

平文(ひょうもん)

小学館「日本大百科全書(ニッポニカ)」の「平文(ひょうもん)」の項目には、以下のような説明がある。

漆器の加飾技法の一種。平脱(へいだつ)ともいう。金・銀・錫(すず)・真鍮(しんちゅう)などの金属の薄い板を文様に切り、漆(うるし)面に貼(は)り付けるものと、その上から漆を塗り埋めたのち漆を小刀の類で剥(は)ぎ取るか、または研ぎ出して金属板を現す方法がある。平文は日本名、平脱は中国名といわれ、わが国には奈良時代に唐から伝わり、当時

³ <https://e-words.jp>

盛んに行われたことは正倉院宝物によっても知られる。平安時代以後は蒔絵(まきえ)と併用され、室町時代からは金具(かながい)の名称でよばれるようになった。[郷家忠臣]

以上から、湯桶読みの「ひらぶん」の「文」は文章(文字、テキスト)であり、「ひょうもん」の「文」は紋様の意味であり、全く別のことばであることがわかる。

2. インターネット時代の通信分野における「平文」

インターネット時代における通信工学のバイブルとも言える、タネンバウム『コンピュータネットワーク』から「平文」の使用例を拾ってみる。英語⁴の原文、日本語⁵の翻訳、中国(大陸版)⁶、および台湾版⁷の該当箇所を比較して検討してみると、以下のような具合である。それぞれ、目印として文頭に「英、日、中、台」を表記した。

[英]“A third limitation is that SMTP sends messages in the clear. It has no encryption to provide a measure of privacy against prying eyes.” (7 THE APPLICATION LAYER, 7.2.4 message Transfer)

[日]“第三に、SMTP はメッセージを平文で送信する。詮索好きな目に対して、プライバシーを確保するための暗号化手段を持たない。”(第7章 アプリケーション層, 7.2.4 メッセージ転送)

[中]“最后, SMTP 发送的邮以明文形式出现。它没有任何加密功能可用来提供防止窥探隐私的措施。”(第7章 应用层, 7.2.4 邮件传送)

[台]“第三項限制是 SMTP 以明文傳送訊息。SMTP 無法利用加密提供保護隱私以對付偷窺者。”(第7章 應用層, 7.2.4 訊息傳送)

[英]“MIME-Version: header is assumed to be an English plaintext message (or at least one using only ASCII characters) and is processed as such.” (7.2.3 Message Format)

[日]“MIME-Version:ヘッダーを含んでいないメッセージは、純粋な英語テキスト(あるいは少なくとも ASCII 文字列のみを利用しているもの)であると仮定されて処理される。”(7.2.3 メッセージ・フォーマット)

[中]“任何不包含“MIME-Version:”邮件头的消息都被假定是英语明文消息(或者至少只使用 ASCII 字符),并按照这种假定情况下的方式来进行处理。”(7.2.3 邮件格式)

[台]“任何未包含 MIME-Version : 欄位的訊息, 則被假設為英文純文字訊息(或至少只使用

⁴ “Computer Networks”6th ed., Andrew S. Tanenbaum, et al. Pearson, 2022

⁵ 『コンピュータネットワーク』第6版, アンドリュー・S・タネンバウムほか, 日経 BP, 2023 年

⁶ 前掲書『计算机网络』

⁷ 『電腦網路』5/e, Andrew S. Tanenbaum, David J. Wetherall, 東華書局, 2012 年

ASCII 字元), 並依此方式處理” (7.2.3 訊息格式)

[英] “The messages to be encrypted, known as the plaintext, are transformed by a function that is parametrized by a key.” (8 NETWORK SECURITY, 8.4.1 Introduction to Cryptography)

[日] “暗号化されるメッセージは平文 (plaintext)と呼ばれ、鍵(key)をパラメータとする関数により変換される。” (第8章 ネットワーク・セキュリティ, 8.4.1 暗号入門)

[中] “待加密的消息称为明文 (plaintext)，它经过一个以密钥(key)为参数的函数变换，这个过程的结果就是所谓的密文(ciphertext)，然后通常由无线电或者通信员传送出去。” (第8章 网络安全, 8.1.1 密码学概论)

[台] “未被加密的訊息稱為明文 (plaintext)，可藉由一個以鍵值(key)為參數的函數轉換” (第八章 網路安全, 8.1.1 密碼學導論)

[英] “When the cryptanalyst has some matched ciphertext and plaintext, the problem is called the known plaintext problem. Finally, when the cryptanalyst has the ability to encrypt pieces of plaintext of his own choosing, we have the chosen plaintext problem.” (8.4.1 Introduction to Cryptography)

[日] “いくつかの対応する暗号文と平文が与えられる場合は、既知平文 (known plaintext)問題と呼ばれる。そして、解読者が都合のよい平文を選んで暗号化することができる場合が、選択平文 (chosen plaintext)問題である。” (8.4.1 暗号入門)

[中] “当密码分析者有了一些相匹配的密文和明文时，密码分析问题称为已知明文 (known plaintext)问是。最后，当密码分析者能够加密某一些他自己选择的明文时，问题就变成了选择明文 (chosen plaintext)。” (8.1.1 密码学概论)

[台] “若有若干明文，且有密文可相互對照時，則面臨已知明文 (known plaintext)的問題。最後，如果密碼分析員能夠對任意選擇的明文加密時，便稱此問題是選擇明文 (chosen plaintext)的問題。” (8.1.1 密碼學導論)

以上の例から、“messages in the clear”あるいは“plaintext”の翻訳語として日本では「平文」が用いられ、中国および台湾では「明文」が用いられていることがわかる。また同時に、上に示した例はすべて「非暗号文」の意味での用法であるが、実は英語では必ずしも「cleartext＝非暗号文」、「plaintext＝非バイナリテキスト」という明確な使い分けがあるわけではなく、cleartext も plaintext も「非暗号文」の意味で使われていることがわかる。

3. 「平文」の使用例

では、日本における「平文」は、いつ頃から、どのような意味で用いられて来たのだろうか。
「平文」は、柴五郎『北京籠城⁸』に電信での「非暗号文」としての用法が見られ、1965 年出版の本書では「ひらぶん」とルビがふられている。1900 年 6 月、扶清滅洋を掲げる義和団は、北京で各国公使館区域を包囲攻撃するに至る。『北京籠城』は、駐在武官柴五郎中佐、留学生服部宇之吉が 60 日余りの籠城生活を記録した書である。

また総理衛門よりも、つぎの二つの書がまいりました。その一は、戦乱の起こって以来月余になり、諸公使および家眷らの安否を本国において心配しておられるだろうによって、電報を取り次いであげるから、各公使無事であるということをいつてやられよ、ただし、目下お互いに対戦中ゆえ暗号電信は取次がれぬゆえ、必ず平文(ひらぶん)をもって軍事に関しないことのみを書いてお出しなさい、というてきました。

(『北京籠城』, 1900 年 7 月 25 日)

こちらからは、さる二十五日の公使および家族の無事なることを本国へ平文で電報せよという書に対し、公使および家族は実際攻め立てられて苦しんでいるのだから、安穩無事だとはいうてやれない、また平文で出しては本国で信用するはずはないから無益ゆえ、電報は出さぬとこたえてやり、...

(『北京籠城』, 1900 年 7 月 27 日)

ほかにも「平文」の用例は以下のように、電信における「非暗号文」の意味での用法が多数見られる。二つ目の『文藝春秋』の記事中「平文」には「へいぶん」とルビが降ってある。

加奈陀政府は(中略)四商業用コードを許可することとなつたこと、及び此種電文の冒頭には bensec, bencom, A.B.C. pet. の符號を附して使用コードを明瞭にし、宛先及署名には平文の佛語若くは英語を用ふべき旨を通報して來た。(『通商彙報』(393), 大阪南方院, 1940)

所が此の方法でもつて、とりあえず第一信を東京に出して見たが、杳として返電がない。たまに來るものは、歸國者の旅行とか送金とかの平文(へいぶん)電報ばかりで、肝心の英・獨開戦についての帝國政府の意嚮は遂に知ることが出來なかつた。

(『文藝春秋』, 第 10 年第 11 號, 10 月特別號, 昭和 7 年 10 月号, 1932)

実は、速記者は本国人だから、平文になおすときに間違つた英語は書こうと思つても書け

⁸ 『北京籠城・北京籠城日記』, (東洋文庫, 53), 平凡社, 1965

なかったのである。

国際学会の発言も、どうせ本国人あるいはそれに近い人がステノをとっているのだから、平文にするときには間違った英語は書こうと思っても書けない。その辺を心得ていると、筋さえ通っていれば相当勇敢な発言が出来るはずである。

(『文藝春秋』, 第44巻第6号, 6月号, 昭和41年6月号, 1966)

これらの例を見ると、インターネットの暗号文が始まる以前から、電信(電報)における暗号文に対する「暗号化しない文」という意味での用法が一般的に流通していたことがわかる。また、速記文に対する普通文の意味でも「平文」が使われたこともわかった。読み方は「ひらぶん」「へいぶん」ともに使われていた。では、「平文」はどこまで遡れるのか、一体どこから来たことばであろうか？

4. 「平文」の源流

近代黎明期の学術用語辞典『工学字彙』には、初版(1986)、再版(1988)、第3版(1894)、ともに「平文」の記述は見られない。

遡って対訳辞書にあたってみるが、堀辰之助『英和对訳袖珍辞書』にも、初版 1862、改正増補 1867 ともに、cleartext, plaintext, 「平文」「ひらぶん」「へいぶん」は見られない。J.C. ヘボン『和英語林集成⁹』にも、和英の部、英和の部併せて、初版(1867)、再版(1872)、第3版(1886)ともに、「平文(hirabun/heibun)」は見られない。1603-04 年刊行の『日葡辞書』にも「平文(hirabun/heibun)」は見られない。

江戸期の唐話辞書と目されているものの中から、俗語を含む日常なことばを収録する俗語辞典類を確認してみるが、『俗語解』(『唐話辞書類集』第10集: 俗語解(長澤本第1-4冊)、第11集: 俗語解(長澤本第5冊・静嘉堂本)、古典研究会編輯、汲古書院)には「平文」は見られず、勿論「俗語解」を種本として校訂した市川清流の『雅俗漢語訳解』(1878)にも「平文(ヘイブン/ヒラブン)」は見られない。『小説字彙』(同『唐話辞書類集』第15集)にも「平文」は見られない。『怯里馬赤』(同『唐話辞書類集』第1集)にも「平文(ヘイブン/ヒラブン)」は見られない。『徒杠字彙』(同『唐話辞書類集』第9集: 安政七 1860 年刊)にも「平文」は見られない。『漢字和訓』(同『唐話辞書類集』第16集: 八卷、井澤中長秀(蟠龍)、享保三年刊本、中二冊)にも、『中夏俗語薈』(同『唐話辞書類集』第16集: 五卷、岡崎元軌(鵠亭)撰、天明三年刊本、中二冊)にも、「平文」の記述は見られない。

近代以降の俗語辞典類、『俗語大辞典』(堀籠美善著、集文館、1917)、『俗語辞海』(松平円次郎、山崎弓束、堀籠美善著、[1909])にも、「平文(ヒラブン/ヘイブン)」ともに見られず、『明治

⁹ 明治大学図書館『和英語林集成デジタルアーカイブス』<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei>

大正新語俗語辞典』(新装版、樺島忠夫、飛田良文、米川明彦編、東京堂、1996)にも「平文(ひらぶん/へいぶん)」は見えない。大槻文彦『言海』(1889-1891年刊)にも「平文(ひらぶん/へいぶん)」は見られず、『大百科事典』(平凡社、1933)にも、「平文」は見られない。

『節用集』の系列では、『書言字考¹⁰』『言辞門』(享保二年(1717))にも「平文(ヘイブン/サンブン/ヒラブン)」は見えず、亀井孝・高羽五郎の『改編節用集 : 五本対照¹¹』上下にもあたってみるが「平文(サンブン/ヒラブン/ヘイブン)」の記述は見当たらない。

ところが、天明六(1786)年刊、柴野栗山の『雑字類編¹²』巻六左類「文書門」に「平文」の記述が見られた。「▲平文(右ルビ:サンブン)。散一」と記述されており、「サンブン」と右ルビが振られ、意味は「散文」とある。

『雑字類編』は、柴野栗山が纂輯したものを弟貞穀が訂修整頓して上梓した書である。本書を上梓した意図は序に次の通り記述されている。「およそ国字は皆、漢語を以て填め、国字四十七音を以て分類した。俗書節用集のごときは、自分は、初めその浅俗なることを疑った。すでに筆をとり紙に臨み事実を記録する卒迫の際、検尋に極めて便利で訳義的切、模索懸想を繰り返さずにすむ。家兄彦輔(栗山)が幼時に纂輯して遺忘に備えたものである。重複を削り誤りを正し訂修整頓した。」(大意)とある。凡例にも「此書ハ事ヲ記シ実ヲ録スル為ニ、編タル書ナレハ只質実的切ノ詞ヲ専ニ輯テ、陰私鄙俚ノ詞ヲモ不_レ忌シテ載タリ。但華藻文飾詩賦ノ詞ハ不_レ載。」と記述している。

森岡健二¹³は『雑字類編』について、「本書が詩文の語彙ではなく、事実を記録するに必要な実用的な俗語まで含めて集め、これに対して漢字の当て方を示そうとしたものであることが知られる。本書が伝統的な『節用集』と全く系統を異にする辞書であることは序によって知られる。」とし、「本書は近世中国語を採録して訳注を施したものと見ていいかと思う。」と解説している。

諸橋轍次『大漢和辞典』を紐解けば、「平文(ヘイブン)」が立項されており、『夢溪筆談、藝文一』を引く以下の記述がある。『大漢和辞典』によれば、「平文」の読みは「ヘイブン」、意味は「散文」ということである。

¹⁰ 『和漢音釈書言字考節用集』 横郁昭武著、村上勘兵衛、享保2 [1717]、題簽書名は「増補合類大節用集」。「国会図書館デジタルコレクション」 <https://dl.ndl.go.jp/pid/14670196>, 「早稲田大学古典席総合データベース」 https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0894/

¹¹ 『改編節用集 : 五本対照』, 亀井孝, 高羽五郎, 勉誠社, 1974

¹² 「早稲田大学古典席総合データベース」『雑字類編』, 柴野栗山[著], 柴貞穀重修, 辻言恭 校字, 1786 https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho02/ho02_00888/

¹³ 森岡健二「雑字類編」, 『日本語学研究辞典』, 明治書院, 2007

【平文】ヘイブン 散文をいふ。〔夢溪筆談、藝文一〕往歳士人多尚對偶爲文、穆修・張景輩、始爲平文、當時謂之古文。

『夢溪筆談』は、中国北宋中期、沈括(1031-1095年)の随筆集、26巻。1088年(元祐3)以降成立。特に科学技術関係の記事が多く、中国科学技術史上注目すべき内容と価値をもつとされ、科学史家J. ニーダムは「中国科学史における一座標」と評価した。夢溪とは晩年沈括が隠棲した江蘇省鎮江の地名である。沈括は、王安石が推進する新法派の官僚の一人であったが、のちに失脚。隠棲後、夢溪にて綴られたのが『夢溪筆談』である。なお、「平文」は「芸文」の条に見える。

『漢語大詞典¹⁴』(第一版、訂補)でも、「平文」の項目には『夢溪筆談』を引き、次のような記述が見られる。

【平文】猶散文。宋沈括《夢溪筆談・藝文一》：“往歳士人多尚對偶爲文，穆修、張景輩始爲平文，當時謂之古文。”宋朱弁《曲洧旧聞》卷九：“方古文未行時，雖小簡亦多用四六，而世所傳宋景文公刀筆集雖平文而務爲奇險，至或作三字韻語，近世蓋未之見。”

中国最初の近代的な辞典とされる『辞源』を確認すると、以下のような記述が見られ、やはり『夢溪筆談』を引く記述が見られる。

【平文】言散文也。〔夢溪筆談〕往歳士人多對偶爲文。穆修張景輩始爲平文。當時謂之古文。
(『辞源』続編丁種一冊 第18版，方穀等編，商務印書館，民国22(1933))

また、『辞源』には「孤經」の項目に以下のような記述があり、「平文」が見受けられる。この「平文」は「平易な文」といった意味合いであろうか。

【孤經】謂經文單子義例不完全者〔春秋序疏〕事同則爲部小則附出孤經不及例者聚于終篇〔唐書楊場傳〕場奏有司帖試明經不質大義乃取年頭月尾孤經句且今習春秋三傳儀禮者纔十二恐諸家廢無日請帖平文以存學家
(『辞源』寅集，陸爾奎等編，商務印書館，1915)

¹⁴ 『漢語大詞典』(第一版+訂補，上海辞书出版社，2024) <https://www.hanyucidian.org>

現代中国の辞書『古代漢語大詞¹⁵』(新版)にも、『大辞海・語詞卷¹⁶』にも同様に、『夢溪筆談』を引く「平文」の記述が見られる。

沈括《夢溪筆談·藝文》：“往歲士人多尚對偶為文，穆修、張景輩始為平文，當時謂之古文。”
(『古代漢語大詞』)

沈括《夢溪筆談·藝文》：“往歲士人多尚對偶為文，穆修、張景輩始為平文，當時謂之古文。”
(『大辞海・語詞卷』)

つまり「平文」の源流を辿ると、どの辞書も『夢溪筆談』を引いている。『夢溪筆談』に見える「平文」の意味は、「散文」であり、一般用語の「平文」は「散文」の意味で用いられていたことが理解される。

なお『佩文韻府』、『康熙字典』には「平文」は見えない。

5. 「平文」は「古文」:「駢文」に対する「散文」

先の『夢溪筆談』における「平文」の該当箇所は、以下のように記述されている¹⁷。穆修や張景が初めて「平文」をし、当時これを「古文」と言ったという。ここで示される「穆修、張景輩始為平文，當時謂之古文。」の「古文」とは具体的に何を意味するのであろうか。

往歲士人多尚對偶為文。穆修、張景輩始為平文，當時謂之古文。穆、張嘗同造朝，待旦于東華門外，方論文次，適見有奔馬踐死一犬，二人各記其事，以較工拙。穆脩曰：「馬逸，有黃犬遇蹄而斃。」張景曰：「有犬死奔馬之下。」時文體新變，二人之語皆拙澀。當時已謂之工，傳之至今。
(『夢溪筆談』《卷十四 藝文一》)

諸雨辰譯註の『夢溪筆談』(中華經典名著全本全注全譯叢書、中華書局、2016)には、穆修について、以下のように、穆修は柳開に倣い古文を提唱し、また張景は柳開と交流があったという注釈が記載されている。柳開の「古文」とはどのようなものであろうか。

“穆修(979—1032)：字伯長，郢州汶陽(今山東汶上)人。大中祥符間進士，授泰州司理參軍，後為潁州、蔡州文學參軍，徙居蔡州。繼柳開之後倡導古文，著有《穆參軍集》。《宋史》卷四四二有傳。張景(970—1018)：少年時曾與柳開結交，柳開贈其藏書。”

¹⁵ 『古代汉语大词典』(新版，上海辞书出版社，2011) <https://www.hanyucidian.org>

¹⁶ 『大辞海・語詞卷』(上海辞书出版社，2017) <https://www.hanyucidian.org>

¹⁷ 「中國哲學書電子化計劃」<https://ctext.org/zh>

『夢溪筆談』の執筆者沈括は、王安石の改革政治「新法」を推進する有力な閣僚であった。ここで言う「古文」とは、北宋における古文復興運動のことで、東英壽は、「文壇の主流が六朝以来の精巧華麗な駢文から、明快達意を貴ぶ古文へと転換した¹⁸⁾」と記述している。

大田錦城『梧窓漫筆¹⁹⁾』巻上にも「平文」が見え、『夢溪筆談』とほぼ同様の記述が見られる。『梧窓漫筆』は、江戸後期の随筆、大田元貞(錦城)著、三編六卷、文化十年(1813)成立。儒教思想を基盤とし、筆者の道德論・人物論など諸事万般にわたる筆者の見解を述べた書である。明治三十年出版の本書では「散」に「サン」、「平」に「ヘイ」とルビが振られている。

蘇綽カ六條ハ。一ニ治_レ心。二ニ敦_レ教化。三ニ盡_レ地利。四ニ擢_レ賢良。五ニ卹_レ獄訟。六ニ均賦役ナリ。サテ誠心誠意ナトノ云フコトハ。宋ノ程朱二先生ノ功ノ様ニ宋儒以来言習セトモ。蘇綽カ治道ヲ説ニ第一ニ治心清心ヲ以テ要務トス。道義ノ根源政事ノ本元ヲ知レリト云ヘシ。唐ノ古文ハ。元結ニ起リテ韓柳ニ成ル。宋ノ古文ハ。柳開穆修尹洙蘇舜欽ニ起リテ歐蘇ニ成ル。六朝ノ惡習ハ韓柳歐蘇ノ功ニテ消滅シテ宗元明清古文ノ世界トナリタリ。去トモ其根胎ヲ尋ヌレハ。此蘇綽ヨリ始レリ。宇文泰ヲ輔ケテ周ノ天下ヲ起シタル時ニハ六朝ノ文綺麗浮華ナリ。其弊ヲ改革セントテ。周書ノ大詔ニ擬シタル詔一篇ヲ作りテ天下ニ示セリ。勾章棘句ニテ佶屈聲呶樊宗師ノ文ニ近ケレトモ。六朝ノ弊ヲ矯ント云ノ志ナリ。サレハ散文平文ヲ要トスル古文ノ一脈モ正心治心ヲ旨トスル古学ノ一脈モ蘇綽ヨリ開キタルナリ。周禮ヲ悦テ、其官名ナトヲ用タルハ。王莽王安石ト其愚謬ヲ同スレトモ。一體ハ卓絶ノ見解アルモノニテ。其六條ノ文モ四六ナトノ輩ニ非ス。感服スヘキ人ナリ

(『梧窓漫筆』後編巻上)

ここで説明しているのは、「古文」の始まりは蘇綽であるということである。

唐の古文は元結に起り韓柳(韓愈と柳宗元)に成る、宋の古文は柳開穆修尹洙蘇舜欽に起り歐蘇(歐陽脩と蘇軾)に成る、六朝の惡習つまり駢文は韓柳歐蘇(韓愈と柳宗元、歐陽脩と蘇軾)の功によって消滅し、宗元明清は古文の世界となったと、それぞれを語り、しかし「散文平文」を要とする「古文」も正心治心を旨とする古学も、その根拠を尋ねるなら蘇綽が開いたものだという事である。

蘇綽は、498-546年、西魏の文人・官僚・政治家であり、思想的根拠として復古主義を採用し、地方官の心得を説いた六条詔書の起草、四六駢体文を古雅な尚書体に改めようとした文章改革、『周礼』になぞらえた官制改革(六官の制)などを行った人物である²⁰⁾。

¹⁸⁾ 東英壽「『太學體』考：その北宋古文運動に於ける一考察」, 日本中國學會報, 第四十集, 1988

¹⁹⁾ 『梧窓漫筆』, 大田錦城著, 小川尚榮堂, 明治30年(1897)

²⁰⁾ 谷川道雄, 平凡社「改訂新版 世界大百科事典」

荒尾禎秀²¹の指摘により、先に取り上げた『雑字類編』に影響を与えたと考えられる『名物六帖²²』(正徳四年(1714))を見ると、第四帖「人事箋」に、以下の通り「平文」についての記述が見られる。ここでは『墨客揮犀』を典拠としている。「平文」には「サンブン」と右ルビが振られている。

平文「墨客揮犀」往歳士人多尚對偶為レ文穆修張景輩始為一——當時謂之古文——

(『名物六帖』第四帖, 人事箋, 講読撰述)

また、先の『梧窓漫筆²³』巻下には、次のように「墨客揮犀、夢溪筆談等に見えたり。」との記述がある。大正二年出版の本書では「平文」には「へいぶん」とルビが振られている。

彼土に數百千年行はるゝ事は皆々よき事なりと思ふは愚の至り也。文章は經義道學などは違うて、一目して知るべき者なり。夫さへも後漢より衰へて、魏晉六朝を経て唐に至りて、韓柳、李翱等古文を唱ふれども、はやり不レ行。天下の文章皆四六排偶の文なり。五代を経て、宋初眞宋まで如レ此。仁宗の時より、天下古文を學ぶ事になりたり。柳開、穆修、張景、尹洙、蘇舜欽を初として、歐蘇の功にて成りたり。儷偶の文に對する故に、古文を平文散文と云ふ。墨客揮犀、夢溪筆談等に見えたり。さて六朝唐文を見るべし。薰帳空兮夜鶴悲。山人去兮曉猿驚。(北山移文)落霞與一孤鶩一齊飛。秋水兼一長天一一色。(勝王閣序)極て佳句なれども、是は唐詩の部類にて、一向文章には非ず。されども夫をも辨ぜずして、數百年よき事と思ひ誤りたり。夫のみならず、人君の詔誥、人臣の表啓などは、中古よりの文體なる故、今明清にても四六儷偶を法とす。俳儷の文は、今の一筆啓上、古文は今の唐様の理に同じ。一目して知るべき文章さへも、其誤千年を経たり。況て知難き經義なり道學なり、いかなる心得違ひあるまじきも知れ難し。此後彼土の經義道學に、文章の韓柳歐蘇の如き人出て、漢學も誤れり宋學も誤れりとて、別に孔孟の心髓を説く程の人出づべきも知れ難し。待一文王一而後興者。凡民也。若夫豪傑之士。雖レ無一文王一猶興。四六文章に欺れたる様に、經學も道義も欺かれざる様に致したき事ならずや。(『梧窓漫筆』後編巻下)

唐に至って韓柳(韓愈や柳宗元)、李翱等が古文を唱えるが役に立たず、天下の文章は皆四六

²¹ 荒尾禎秀, 「『雑字類編』と『名物六帖』—人事門(箋)を中心に—」, 東京学芸大学紀要, 第2部門, 人文科学, 巻25, p. 199-211, 1974年

²² 『名物六帖』(国文学研究資料館国書データベース)<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100067436/>, 『名物六帖』(早稲田大学古典籍総合データベース)

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_00018/

²³ 『梧窓漫筆』(『名家随筆集』上(有朋堂文庫), 有朋堂, 大正2年)

排偶の文であった。宋代までこの様であり、仁宗の時から古文を学ぶようになり、柳開、穆修、張景、尹洙、蘇舜欽を初め、歐蘇(歐陽脩や蘇軾)の功によって完成した。駢文に対するこの古文を平文散文と言ひ、墨客揮犀、夢溪筆談等に見えるということである。六朝唐文を見るなら、唐詩の部類あつて一向に文章ではないが、数百年もの間、良い事だと思ひ違ひをしていた。後に、韓柳歐蘇(韓愈と柳宗元、歐陽脩と蘇軾)のような人が出て、漢学も宋学も誤りで孔子孟子の真髓を説く人も出た。最後は、駢文に欺かれたように經学も道義も欺かれないうにしたいものだと思ひくくっている。

『名物六帖』や『梧窓漫筆』で取り上げられている『墨客揮犀²⁴』(卷二)に見える「平文」についての記述も以下の通り、穆修と張景の文章論が語られ、『夢溪筆談』とほぼ同様の内容となっている。

往歲士人，多尚對偶為文。穆修、張景輩始為平文，當時謂之古文。穆張嘗同造朝，待旦於東華門，方論文次，適見有奔馬踐死一犬，二人各記其事，以較工拙。穆修曰：「馬逸，有黃犬遇蹄而斃。」張景曰：「有犬死奔馬之下。」時文體新變，二人之語皆拙澀，當時已謂之工，傳之至今。

孔凡礼²⁵の点校によれば、『墨客揮犀』の内容は他の数多くの書物に依拠していることが次のように示されている。わけても『夢溪筆談』によるものが多いことがわかる。

広範かつ綿密な調査の結果、『墨客揮犀』のうち、『晋書』に2編、『魏書』に1編、『北史』に1編、『南史』に1編、『因話録』に3編、『本朝名臣録』(すなわち『五朝名臣言行録』)に1編、『魏王別録』に1編、『廬陵歸田録』に1編、『湘山野録』に1編、『夢溪筆談』に51編、『倦遊雜録』に35編、『遯齋閒覽』に34編、そして『冷齋夜話』に19編収録されていることが判明した。『宋朝事實類苑』にも1編見られるが、出典が明記されていない場合もある。上記152項目に加え、『墨客揮犀』にはさらに74項目が収録されている。これらの項目は主に『夢溪筆談』、『倦遊雜録』、『遯齋閒覽』、『冷齋夜話』の四書に由来する。

經過廣泛深人的考察，墨客揮犀出自晉書者二則，魏書者一則，比史者一則，南史者一則，因話録者三則，本朝名臣録（即今五朝名臣言行録）者一則，魏王別録一則，廬陵歸田録一則，湘山野録一則，夢溪筆談五十一則，倦遊雜録三十五則，遯齋閒覽三十四則，冷齋夜話十九則。另一則，見宋朝事實類苑，偶脫出處。

²⁴ 前掲「中國哲學書電子化計劃」

²⁵ 『侯鯖録・墨客揮犀・続墨客揮犀：唐宋史料筆記叢刊』（歴代史料筆記叢刊），[宋]趙令時，[宋]彭□輯撰，孔凡礼点校，中華書局，2002年

除以上所説一百五十二則、墨客揮犀還有七十四則。墨客揮犀主要出自夢溪筆談、倦遊雜錄、遜齋圖覽、冷齋夜話四書。

また、宋代の人物編纂の文献であるが、孔凡礼は、編纂者について5つの説があるとする。

一つ目は匿名説。これは主に『直齋書録解題』と『宋史藝文志』に帰せられる。王国維は、この書は「汴宋末期に様々な書物から選りすぐられた人々によって編纂された」（『續墨客揮犀附録』を見よ）と、より具体的に述べている。

一、佚名。直齋書録解題和宋史藝文志主之。王國維則認為此書「係汴宋末選人採輯諸書為之」（見續墨客揮犀附録）、説得比較具體。

残りの4つは、仁宗朝彭乘、彭淵材、彭乘、筠州高安人彭乘、すべて「彭」に関するものである。孔凡礼によれば、『墨客揮犀』の輯撰は、実際には彭姓の慧洪氏族の一員によって行われたことは確実である。その目的の一つは、現在彭氏に帰せられている彭几（淵材）を称えることであった可能性がある。『墨客揮犀』と『続墨客揮犀』を併せて『冷齋夜話』からの引用は合計39項目にのぼる。『冷齋夜話』が出版される以前は、これらの項目を引用できるのは、慧洪と特に深い関係にあった彭氏族の人物だけであった。このことは、『墨客揮犀』の編纂者が彭□であったことを示唆しているというのである。

いずれにしても、『墨客揮犀』は他の書物からの引用が多いものの、原典、あるいは原典に近い版に基づき、宋代の逸話や物語、詩、文芸評論などを詳細かつ正確に引用しており、貴重な資料であることは間違いない。

寛文生²⁶によれば、「特に科挙出身の新興官僚層が彼らの思想や主張を表現できる達意の文体を強く求め、その模範を司馬遷の『史記』や諸子百家の文章に見いだし、韓愈がそれを「古文」と呼んだのが「古文運動」の名のおこり」であり、「韓愈や柳宗元らが提唱した古文は、唐末から宋初にかけて一時忘れられていたが、北宋の欧陽修が科挙の試験に古文で答案を書いた蘇軾・蘇轍・曾鞏ら、のちに〈唐宋八大家〉に数えられる人々を合格させたことから、古文は完全に散文の主流となり、以後、今世紀のはじめ口語（白話文）運動がおこるまで、その地位は揺らぐことがなかった。」ということである。

先に示した通り、かつて文人の多くは対句で文章を綴る駢文を尊んでいたが、穆修や張景たちは「平文」を作り始め、当時それを「古文」と呼んだことが『夢溪筆談』に書かれていたが、その例えとして、穆修と張景が文章論を戦わせた次のような逸話を記している。

穆修と張景が朝廷に参内した時、早朝、東華門の外で夜明けを待ちながら文章論を戦わせて

²⁶ 「古文運動」（〔寛文生〕平凡社「改訂新版 世界大百科事典」）

いた。その時、たまたま彼らの前で、走ってきた馬に一匹の犬が踏み殺された。二人は、その出来事を文章に記して優劣を競い合った。穆修は「馬逸、有黃犬遇蹄而斃」、張景は「有犬死奔馬之下。」と書いたということである。

浅見洋二²⁷は、北宋の畢仲詞『帳府燕閑録』(宛委山堂本『説邦』卷四一)に見える欧陽脩についての記事中の同様の話を示し、そもそも題材そのものが、かつての駢文では描写対象になり得なかった出来事であることを次のように指摘している。

『夢溪筆談』と『帳府燕閑録』の逸話を示した上で、「前者の記事は文章表現の「工拙」の問題として、後者は「繁簡」の問題として語られた議論であるが、まず注目されるのは次のような点である。すなわち、文学作品(文章)の前に描写対象として出現した、あるいは描写対象として選ばれたのが、馬が犬を踏み殺すという偶然に(「適ま」)出来した出来事であったということ。馬が犬を踏み殺すという出来事は、かつての駢文の描写対象とはなり得なかった出来事であろう。駢文という文体の規範が消え去った後に登場した「平文」すなわち「古文」だからこそ描写対象として見出し得た「日常」の一齣と言えるかもしれない。」「描写対象が同じであるにもかかわらず、(中略)言語表現がさまざまに分岐してしまうのは、その描写対象が「規範」の外部に位置する「日常」であったからではないか。」と。

欧陽文忠在翰林日、嘗与同院出遊、有奔馬斃犬於前。文忠願曰「君試言其事」。同院曰「有犬臥於通衢、逸馬蹄而殺之」。文忠曰「使子修史、万卷未已也」。「内翰以為何如」。文忠曰「逸馬殺犬於道」。(欧陽脩が翰林にあったときのこと、同僚たちと外出したところ、走ってきた馬に犬が踏み殺される出来事に出くわした。欧陽脩は「試しにこの出来事を文章にしてみたまえ」と言った。同僚は「犬の通衢に臥す有り、逸馬蹄(ふみにじ)りて之を殺す」と書いた。欧陽脩は言った。「君が史書を書いたら、万卷を費やしても足りないだろう〔冗漫すぎることを。同僚が「では、あなたならどう書くか」と訊ねると、欧陽脩は「逸馬犬を道に殺す」と書いた。〕(畢仲詞『帳府燕閑録』(宛委山堂本『説邦』卷四一))

平仄や対句などを重視する駢文の修辭的側面のみならず、日常の一齣さえもが描写対象になり得るという題材の面からも、達意の「散文」たり得たことを、この逸話は示していることが理解される。

以上、「平文」について検証した結果、近代通信のことば「平文」の源流は『夢溪筆談』や『墨客揮犀』の中に表れる「平文」に求めることができた。「平文」の始まりは、韓愈や柳宗元による「散文改革運動(古文復興運動)」にある。その意味するところは、駢文に対する達意の「平文

²⁷ 浅見洋二「「形似」の変容：言葉と物の関係から見たいわゆる宋詩の日常性に関する一考察」,(小特集3 宋代士大夫の日常空間), 中国, 20, 390-408, 2005

(散文)」のことで、当時これを「古文」と呼んだ。「平文」は、装飾的で内容の空疎な「駢文」ではなく、自らの思想や主張を表現できる達意の新しい文体としての「散文」を示すことばであった。

「平文」の記載がある辞書類はみな、『夢溪筆談』や『墨客揮犀』を典拠としている。また先に示した通り、対訳辞書類においては、『日葡辞書』や『英和对訳袖珍辞書』『和英語林集成』などの日本で出版された対訳辞書には「平文」は見えないが、中国起源の『英華字典²⁸』に関しては、『羅存德英華字典』(1866-69)の plain の項目に「a plain style, 平寫, 平文」、quiet の項目に「a quiet style, 平文, 清順之文」が見える。またこれを引き継ぐ『井上哲次郎訂増英華字典』(1884)にも同様に、plain の項目に「a plain style, 平寫, 平文」、quiet の項目に「a quiet style, 平文, 清順之文」が見える。日本で出版された対訳辞書には「平文」は見えず、中国起源の対訳辞書には「平文」が見える。

さらに、先に見た通り『節用集』には見えないが、中国の『辞源』『漢語大詞典』や諸橋轍次『漢和大辞典』、また近世中国語を多く掲載し、『節用集』とは全く系統を異にする『雑字類編』や、『雑字類編』に影響を与えたと考えられる『名物六帖』には見られることから、「平文」は中国起源の語と見て間違いないであろう。

6. 日本語の柔軟な造語法

『夢溪筆談』や『墨客揮犀』に見られる「平文」とは、古文復興運動における「駢文」の対立概念としての「古文」のことであり、「散文」を意味し、文芸に関する近世中国語であった。文芸論上の文体に関する用語を cleartext や plaintext という近代通信に関する用語の訳語として用いた柔軟性に、日本語の独自性を見て取ることができる。

かつて、甲賀斐宜政は化学用語の命名について、宇田川榕菴の『舎密開宗』以来、欧米各国の化学書を訳述するものは多いが、その物名を訳する者の多くは勝手気ままに訳し、甚しきは同人同書にして一物を称するに矛盾があるのは、初学の艱難があり、一つのものに複数の名称があるのは博物の弊害となるため、まずは元素名を統一したいとしつつも、既に一定普通の古訳のあるものはそれを用い、適切な訳字のないものは仮名によって原名を記し、読み難い漢字を用いるのに比べれば遥かに優れている(「既ニ一定普通ノ古譯アル者ハ則チ之ヲ保存シ其ノ適切ノ譯字ナキ者ハ則チ假名ヲ以テ原名ヲ記セリ之ヲ彼ノ險澁讀ミ難キ漢字ヲ用ヰル者ニ比スレハ[遙]カニ優ル所アリトス²⁹」)と述べた³⁰。

既に一般用語として流通していた「輻輳」が通信用語として定着した³¹と同様に、「平文」に

²⁸ 中央研究院近代史研究所《英華字典資料庫》<https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>

²⁹ 甲賀宜政「化学命名論」,『東京化学会誌』,第一帙第一冊,明治13年(1880年)

³⁰ 拙稿「日本人の空気観」,『心身/身心と環境の哲学』,汲古書院,2016年

³¹ 前掲拙稿「关于汉语词“輻輳”」

においても、「散文」を意味する文芸に関することば「平文」を、近代通信における cleartext や plaintext の訳語として、そのまま適用する柔軟な姿勢が見受けられる。

同じ漢字文化圏の地域でありながら、中国においては、Computer network に対する「计算机网络」、Routing algorithm に対する「路由算法」、MPLS (Multiprotocol label switching) に対する「多协议标签交换」のように、新概念に対する用語を、その語の意味する内容に忠実に新たに訳出する。cleartext, plaintext に対しては「明文」という訳語を訳出した。

中国語では、原語の意味に対して忠実な翻訳語が当てられるのに対して、日本における翻訳語の形成はゆるやかで、分野が違っていても既に流通していることばを柔軟に活用する姿勢は寛容である。日本語の造語法は柔軟であると同時に、それゆえ曖昧な側面もあるとも言える。

近代通信のことば「平文」については、「平文 $\longleftrightarrow$ 暗号文」という対立項が示され、その元となった「平文」の源流は、『夢溪筆談』や『墨客揮犀』に見られる文芸用語としての「散文」を意味する「平文」に求められ、「平文(散文=古文) $\longleftrightarrow$ 駢文(韻文/四六駢儷体)」という構図で示すことができる。

むすび

近代通信の用語「平文」は、インターネットが始まる以前から、電信における暗号化しない文章という意味での用法が一般的に流通していたことが理解された。また、速記文字やモールス信号に対する普通文の意味でも「平文」が使われ、暗号化やバイナリ化など、何らかの操作を施していない文字列という意味のことばであることが確認された。

遡ると、「平文」の源流は、『夢溪筆談』や『墨客揮犀』に見られる「平文」に求めることができた。その意味するところは、「駢文」の対立概念としての「散文」であり、当時はそれを「古文」と称した。「古文」は、韓愈や柳宗元の「散文改革運動(古文復興運動)」に始まり、穆修や張景が「平文(散文)」を成した。

「平文」は、装飾的で内容の空疎な「駢文」ではなく、自らの思想や主張を表現できる達意の新しい文体としての「散文」を示すことばであった。

近代通信の用語「平文」も文芸用語「平文」も、「平明平易な言葉」という意味において共通性を見出すことはできるものの、分野を跨いだ用語の使用であり、あらためて、日本語における翻訳語の造語法についての柔軟性が再確認された。

本稿では、近代通信の翻訳語「平文」を取り上げ、中国における翻訳語の造語法を視野に入れながら、時代を遡って検証し、近代語漢語の形成、伝播、翻訳とその定着の一斑について考察を行った。